

# うたごえ新聞

1/4・11

(1999年)

NO. 1692

THE SINGING VOICE OF JAPAN (UTAGOE)

日本のうたごえ全国協議会機関紙  
うたごえ新聞社  
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-16-36  
☎03(3209)0638 FAX03(3200)0105  
振替口座 00120-6-5631 毎週月曜日発行



▲襟裳岬の朝日

# 北海道発 世界へ 海と森を蘇らせた襟裳のロマン

「人も森も海も、みんな一緒に生きている。自然とともに生かされあっている」  
青い冬の海と、その海を抱くように襟裳岬から三状に続く浜辺を眺めながら思う。襟裳の先端から「百人浜」まで半世紀前、このあたり一帯、速15メートルを越える風が草木も枯れ果て、赤土をむき出しにした荒地地だった。  
「襟裳岬はホーン岬と並び地球上有数の『風の道』(日高山脈と海からの風)で、年間170日も吹き、ほぼ一年中強風にさらされていると言っても過言ではない」。明治以降の入植者の増大と大規



▲アイヌの民族楽器ムックリを使って〈襟裳の…〉序章を演奏する北海道合唱団 (50周年記念祭典TOKYOより)

を海に流し、森からの養分が来なくなった海は昆布も根から絶え、やがて海の色さえ赤く変わっていった。  
この荒涼の原野に、約10年余の歳月をかけ木を植えつつ、元の緑の原野、海の幸をたたく青い海を蘇らせた人たちがいた。この雄大なロマンを合唱構成に描き、北海道発、地球へのメッセージとして、'99年日本のうたごえ祭典inさっぽろが準備されている。  
この史実に着眼し、曲創りにとりくむ北海道合唱団団長 99年日本のうたごえ祭典(8月20、22日、Kittaraホール他)運営委員長の木内宏治氏の案内で、えりも町を訪ねた。三輪純永記者 (6・7面へ)

模な伐採で、木が倒された地に吹きつけ強風は赤土の土砂

## 99 賀正

99日本のうたごえ祭典 in さっぽろ (8月20~22日)へ  
合唱による構成 〈襟裳の森の物語〉



▲荒涼とした原野は今、緑豊かな森に蘇り海は青く波打つ(襟裳岬の浜で)

### 99年新年号 目次

新春インタビュー・声楽家 中澤 桂さんに聞く 3面 □ 今年もこんな歌が音楽が

全国のサークル「鎮魂と希望の合唱団」から 太鼓(兵庫) □ 3びきのくま(大阪) □ 10周年コンサートもみじ合唱団(東京)

「地雷ではなく花をください」を広げる 50周年記念祭典TOKYO  
□ レインボー・ヨース(大阪) □ 職場の部1位仙台D51合唱団(宮城) □

高橋正志 新春あいさつ 4・5面 □ 襟裳に生きる 99年日本のうたごえ祭典  
幹事長 人々のロマン in さっぽろへ 6・7面 □

新しいことば感覚 ジュエル(ミュージック・トゥデイ和田諒香) □ かぼちの商会他(芸能マンスリー伊藤 強) □ 「襟裳の森の物語」序章

映画部 試聴室 10・11面 日比混血児ワークショップミュージカル 連載 「母の想い...少女の願い」 □ 「空を見えますか」(池辺晋一郎) 12面

「夢」。人間だけが見る夢に人は希望をつなぎ、歩を進める。大阪ドームも終わったばかりのフォーラム祭典も、あのホールいつぱいに響くいのちの輝きその歌を夢見たからだった。  
☆ ☆ ☆  
こんもりと真っ白な雪が岩山を覆う石山緑地はまだ冬の装い。ここで夏の夜、どんな歌声が響くのだろう、とまた夢がふくらむ。すわっ、もう日本のうたごえ祭典inさっぽろに目が。8月20、22日、札幌のKittaraホールでの二つの音楽会、野外劇場石山緑地でのコンサートなど、今年の祭典もまたまた楽しみ。  
☆ ☆ ☆  
昨年暮れ、第一回全国実行委員会が札幌で開かれた。初の日本のうたごえ祭典開催に外の雪もただ美しく見える程の地元の熱。そこで発言された元炭坑婦人協議会の多嶋美子さんには、これが「道産子魂」というものか、驚きと尊敬。声が大いなのが私の取り柄、と大きな声で「今、闘いの歌が弱い」と話した後、「多嶋流『炭坑の子』だよ」と一曲披露。大いにはっぱをかけた感。  
☆ ☆ ☆  
これを受けて北海道のうたごえも、北海道ならではの祭典を、と「北海道発地球へ」のメッセージ「襟裳の森の物語」はじめ、着々と準備。  
各地からの歌声満載で、今年も紙面から全国をつなごう。今年もよろしくお願ひします。(純)

